医療の届かないところに医療を届ける

ジャパンハートニュース
Japan Heart News

特集

- ジャパンハートこども医療センターの小児部門の活動は2年目を迎えました（カンボジア）
- 日本と同じレベルの総合治療体系の確立に向けて（ミャンマー 専門医療プロジェクト）
- 日本語スピーチコンテストで優勝！（ミャンマー 養育施設Dream Train）
- 国境を越えた医療プロジェクトが推進中（ラオス）
- 病気と闘う妹と、いつも我慢しているお兄ちゃんの笑顔が見れた日（SmileSmilePROJECT）

CAMBODIA-カンボジア

ジャパンハートこども医療センターの小児部門の活動は2年目を迎えました

2018年6月にオープン以来、ジャパンハートで治療を受けた患者さんは3,000名以上、小児がんの患者さんは30名に上りました。小児がん患者さんのうち、ほとんどがカンボジア国内の他の医療機関では治療が難しく、紹介されて来た患者さんたちです。ジャパンハートの病院はそんな患者さんたちにとって最後の砦のような存在となっています。

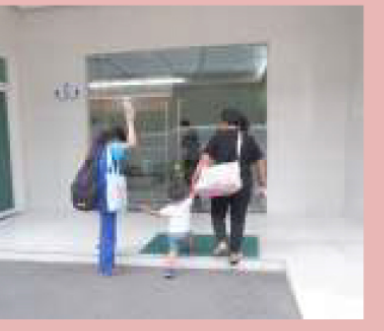
Patient Story～患者さんの話～

■およそ22万円で小児がん患者さん一人に放射線治療を行うことができます。

小児がんを治療するためには、抗がん剤治療とあわせて、放射線治療が必要な場合があります。カンボジアで放射線治療を受けるには、国内で唯一その機器を備えた国立がんセンターに通わなければなりません。放射線治療は1回あたり80ドルで、 12～15回受ける必要があります。 カンボジア国内の多くのがん患者さんは、途中でお金が続かなくなり、放射線治療を道半ばで断念することが少なくないそうです。

そんな中、当院に入院する患者さん4名は最後まで放射線治療を継続することができました。これは、皆様の温かいご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。

これからさらに2名の患者さんが放射線治療を控えています。最後まで放射線治療を受け治療を完遂してもらうために、引き続き努力を継続してまいります。



▲写真は放射線治療を受けるためにがんセンターへ移動している様子、施設の中に入る様子

MYANMAR-ミャンマー

日本と同じレベルの総合治療体系の確立に向けて（口唇裂・口蓋裂治療）～専門医療プロジェクト～

500～600人に1人の割合で出生するとされる口唇裂・口蓋裂という病気は、日本では総合治療体系が確立され、ほぼ機能回復が見込める疾患とされています。しかし、ミャンマーでは経済的問題や専門人材の不足によって、治療が受けられない、もしくは治療を受けていても機能が回復しないまま成長する患者さんがまだまだ多いのが現状です。そのことによって患者さんたちは、見た目の問題だけでなく、うまく言葉を発する事ができない事などから、進学や就職を諦めるなど社会的な生活を送ることが困難な状況にあります。

そのような現状を打開しようと、2019年9月に「ミャンマー口唇裂・口蓋裂総合治療プロジェクト」がスタートしました。これはこれから約10年をかけて、日本で確立されている治療体系をミャンマーの実情に沿った形で移行し、出生直後からフォローアップを開始する治療体系の基礎作り、またそれらを担う看護師・口腔外科医・矯正歯科医・言語聴覚士等の人材育成、ミャンマー各地に口唇裂・口蓋裂センターの立ち上げを目指します。

このプロジェクトは、口唇裂や口蓋裂を持った患者さんたちが、思い切り笑えるようになることを目標に進めてまいります。

日本語スピーチコンテストで優勝！～養育施設Dream Train～

8月25日、ミャンマー日本国大使館・MAJA共催の日本語スピーチコンテスト本選に出場し、見事優勝を果たした女の子がいます。名前は、ティンナンダーリン。17歳のときにワッチェ慈善病院のあるミャンマー中部のザガイン管区から来た、23歳の大学生です。彼女は、勉強が大好きでありながら高校進学を諦めなければならないような貧しい村で育ったため、スピーチでは「ミャンマーを発展させるために、私にできること」というタイトルで、貧しい村々に質の高い教育を届けたい、という夢を語りました。応援に駆けつけた数十人の子どもたちは、我らがティンナンダーリン姉さんの勇姿に刺激を受け、審査結果発表の瞬間には誰からともなく「ヒャァ～～！！！」と喜びの声が漏れました。そして、現在Dream Trainには、彼女が日本語を武器に舞台に立ったように、他にも様々なスキルを伸ばし活躍の機会を待つ子どもたちがいます。例えば、工作クラブに所属する男の子、そして裁縫を趣味とする女の子です。9月にヤンゴン日本人学校で行われたバザーに出店した際には、それぞれ手作りの自信作（お箸・バターナイフ・バッグ・テーブルクロスなど）を出品しました。お客さんの生の声や反応を見るのは初めての子どもたちもおり、仕事の難しさや面白さをたくさん感じた1日となりました。

応援に駆けつけたDream Trainのみなさまとともに記念撮影！

出店したバザーにて

LAOS -ラオス

国境を越えた医療プロジェクトが推進中

ラオスでは、特にヨード不足に起因した甲状腺疾患が多く、治療が必要にもかかわらず、医療者不足や医療技術の問題から治療が難しい状況にありました。そこで、私達はラオス北部ウドムサイ県病院で外科、内科、看護に対しての技術移転を行うことをベースにプロジェクトを推進しています。前回に引き続き、5月は吉岡秀人医師の手術活動、6月は大江将史医師の内科診療活動、7月は森徳郎医師の内科診療活動を実施致しました。また、7月より医療者限定にはなりますが、短期ボランティアの受け入れを開始しております。7月、9月と計4名のボランティア様のご協力の下、ウドムサイ県病院にて安全な医療を届けることができております。

また、出生時より斜顔裂が認められ複雑症例のため2015年に日本へ行き口蓋形成・眼窩底への骨移植を含む顔面形成術を実施した当時1歳8カ月のチャンペン（Ms.Chanpheng）が、本年10月にカンボジアのジャパンハートこども医療センターで、2回目の手術が日本の外科チームご協力のもと無事終了いたしました。日本・カンボジア・ラオスの国境を越えた協力体制により、医療を届けることができるよう一丸となって努めます。

Smile Smile PROJECT

病気と闘う妹と、いつも我慢しているお兄ちゃんの笑顔が見れた日

2019年5月～11月までの活動報告

- **5月**
  - キッザニア甲子園
  - ディズニーランド（個別企画）
- **6月**
  - アドベンチャーワールド（個別企画）
- **7月**
  - 病院がプラネタリウム（千葉こども病院）
  - サンリオピューロランド（個別企画）
- **8月**
  - 第6回キッズセミナー（ジョンソン・エンド・ジョンソン様協賛）
  - 家族２組ではとバス（個別企画）
  - ジャパンキャンサーフォーラムブース出展（国立がんセンター）
  - H2Oサンタフェスティバル　ブース出展（阪急うめだ百貨店）
- **9月**
  - 東京ディズニーシーご招待企画
- **11月**
  - キッザニア東京ご招待企画

今回はイルカと仲良くなりたい5歳の女の子、さきちゃんとご家族の旅です。さきちゃんは脳腫瘍で、抗がん剤治療を行いお家で過ごしていました。さきちゃんは泳ぐことが大好きで、病気になる前はスイミングスクールに通っていました。そんなさきちゃんの希望は大好きなイルカと泳ぐこと。今回は動物が大好きなお兄ちゃんの「パンダに会いたい」と、さきちゃんの「イルカと触れ合いたい」という兄妹の希望が両方叶うということで、和歌山県のアドベンチャーワールドに決定です。当日は良いお天気に恵まれ出発！ 家族4人でパンダになって記念撮影をしたところで、吉岡春菜医師も合流。早速やんちゃな赤ちゃんパンダ彩浜（さいひん）に会えました。かなり近くでジャイアントパンダを見ることができて、家族みんなで「可愛い！」を連呼しました。

動物好きのお兄ちゃんは可愛いパンダの姿を写真におさめようと、一生懸命カメラを回します。さきちゃんもお兄ちゃんも、パンダに負けない可愛い笑顔をたくさん見せてくれました。旅行後、お母さんから「私達だけでは、連れて来てあげられなかった。幸せな時間を過ごせたのもサポートのおかげです。さきちゃんの笑顔もだけど、お兄ちゃんが楽しんでくれてすごく嬉しかった」という言葉をいただきました。頑張っている娘の希望を叶えてあげたい、いつも我慢しているお兄ちゃんを楽しませてあげたい……という愛情いっぱいのご両親のお手伝いが少しでもできたとしたら、私たちも嬉しいです。

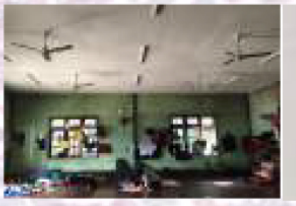
Gratitude- 感謝の声

温かなご支援を頂き、誠にありがとうございました

◀クラウドファンディングにより合計 1,516,000 円のご支援を頂き、心肺蘇生法トレーニング人形 4 体と自動除細動器を購入しました。ご支援に心より感謝申し上げます。

今後、ワッチェ慈善病院のミャンマー人看護師に心肺蘇生法レクチャーを繰り返し行い、最終的には当院のミャンマー人看護師から入院中の患者や家族、巡回診療先の村の人達にもレクチャーをしていくことを目標に活動を開始します。

▼Dream Train の男子棟・女子棟・食堂・礼拝堂に「シーリングファン（天井に付ける扇風機）」を設置させていただきました。真夏の暑さだけではなく、6 ～ 10 月の雨期のジメジメも和らげてくれています。



TOKYO OFFICE NEWS- ジャパンハート東京事務局より

「ジャパンハート国際協力フェス」開催告知！

2020 年も、ジャパンハート国際協力フェスを開催します。2019 年は、東京・大阪会場合わせて約 150 人の皆さんにご来場いただき大盛況に終わりました。ジャパンハートの活動内容のご説明に加え、「ボランティアや研修への参加を考えているので具体的な話を聞きたい」「観光つきの海外ツアーに興味がある」「マンスリー寄付を検討している」「里親制度に興味がある」といった方のご相談を個別に承っています。皆さん、ふるってご参加ください！

＜開催日＞

3月１４日（土）東京会場

3月１５日（日）大阪会場

※会場、時間等の詳細が決定次第、
ジャパンハートのホームページ内
「イベントカレンダー」でご案内差し上げます。

＜対象＞

医師、看護師、看護学生、一般学生、社会人、
ジャパンハート会員、ジャパンハート非会員

ゲスト：仲本リサさん
看護師でイラストレーター。ジャパンハートの短期ボランティアに参加実績あり。2018 年はミャンマーで、2019 年はカンボジアでの短期ボランティアに参加されました。その際の経験についてたっぷり語っていただきます！

特定非営利活動法人 ジャパンハート
〒110-0016　東京都台東区台東1-33-6　セントオフィス秋葉原10階
Tel：03-6240-1564　Fax：03-5818-1610
E-Mail：info@japanheart.org　HP：https://www.japanheart.org

※本郵送物は総務省の指導により私信ではない郵送物として送付しています。（2019年12月1日発）

2 *Episode from Myanmar* ～ミャンマーからのエピソード～

患者さんに寄り添い、私たちが受け取る幸せとは

ミャンマーのワッチェ慈善病院には今日も多くの患者さんがやってきます。

上半身に大きな火傷の跡を負った 14 歳の少年、ソーナイ君が初めてワッチェ慈善病院に受診したのは昨年の冬のことでした。その半年前、痛ましい事故により火傷を負い、直後に現地の病院を受診したのですが、十分な治療を受けることができなかったそうです。やけど後のひきつれのため首と胸、体と腕がくっつき、顔を上げることも、腕も上げることもできない状態でした。

当院にて３回の皮膚の移植手術を行いました。皮膚移植手術は痛みも強く、入院期間も長くなります。看護師がソーナイ君に「はやく家に帰りたい？」と聞くと「ううん、帰りたくないよ。ここの看護師さんは優しいから。」と。14 歳の少年です、家に帰りたくないはずがありません。それでも、笑顔でそう言って看護師を気遣ってくれるソーナイ君の優しさ。そして、ひとりひとりの患者さんたちを自分の家族のように心配する看護師たち。このような愛情の循環を見るたびに本当に満ち足りた気持ちになります。

ソーナイ君が顔を上げ、腕を上げてこちらに笑顔で大きく手を振ってくれる姿に出会うたびに、私たちもまた大きな幸せを受け取っています。

国際協力とは、一見すると私たちが与えることのようですが、時として私たちは与えたもの以上のものを与えられることがあります。

ジャパンハートミャンマー　常駐看護師　加藤まどか

1 *Episode from Cambodia* ~ カンボジアからのエピソード ~

現場で活躍する看護師が見た、カンボジアで根付く日本の医療

今年９月、何度も危機を乗り越えながら闘病を続けていた３歳の女の子が短い人生を終えました。がんが全身に転移してしまったためです。おしゃれが大好きな可愛らしい女の子でした。

カンボジアの風習から、ほとんどの患者さんは自宅で最期を迎えることを強く望みます。しかし、この女の子のお母さんが選択したのは、「ジャパンハートの病院で最期を迎える」ということでした。そのお母さんの決断から、私たちへの信頼の気持ちが伝わってきました。

女の子はお父さんの仕事が休みの日曜日を選ぶかのように、大好きなパパとママに見守られ最期を迎えました。当日出勤していたスタッフだけでなく、休日のカンボジア人スタッフほとんど皆が病室に駆けつけました。特にずっとこの女の子を看護していた１人のカンボジア人ナースが病室に駆けつけると、お母さん自らそのナースに抱きつき一緒に泣いていました。カンボジア人ナースがいかに患者や家族の心に寄り添った質の高いケアをしていたか、その瞬間すべてを感じとることができました。

パパとママと女の子、家族３人の姿が見えなくなるまで皆で見送りました。

カンボジア国内の数ある病院とジャパンハートこども医療センターの違うところ。

それは、質の高い心に届く医療を提供できるところだと思います。

心に寄り添う日本のケアが、ジャパンハートを通して一緒に働くカンボジア人スタッフにも深く根付いていることを、一人の患者さんを見送りながら深く感じられました。そして、心に届く医療をカンボジアで提供していくことは、私たち日本人医療者の使命だとも感じました。

後日お母さんは何度か病院に顔を見せに来てくれています。

「仕事を始めようと思う」お母さんが私たちに伝えてくれました。

わが子を失うという強い悲しみの中でも、お母さんはもう前に進もうとしています。

私たちも、一人でも多くの患者さんが幸せになれるよう、一歩一歩前に進み続けます。

ジャパンハートカンボジア　常駐看護師　福田麗那